発行：特定非営利活動法人 北海道みなとの文化振興機構 北海道みなとの文化研究室　　発行日：令和７年（2025）11 月 30 日

北海道 みなとまち紀行

留萌編①

第 12 号

■留萌編①

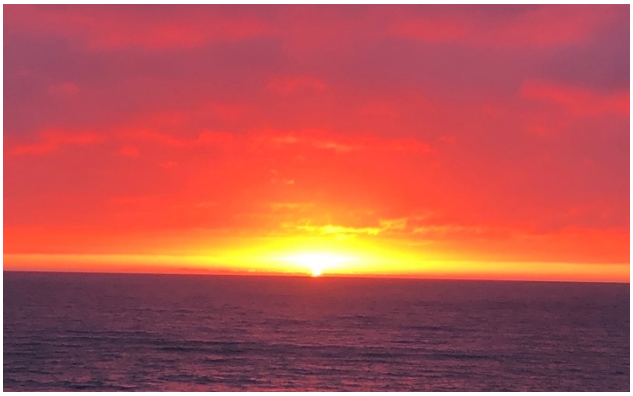
留萌はアイヌ語のルルモッペ（潮の静かに入るところ）に由来し、寛永７年（1630）頃から和人が住み始めました。幕末には留萌川の河口に多くの千石船が停泊し賑わいを見せていました。明治２年（1869）に「留萌」と命名され、明治中期には海産物や木材の増加に伴い、海運業者や倉庫業者が進出し、交通・商業の要衝として栄えました。しかし冬季の日本海は時化がひどく外海の影響を受けない近代的な築港の必要性に迫られていました。そのため留萌の有志により明治中期から留萌港修築の誘致活動が行われ明治後期から港湾修築が本格的に始められました。そして昭和初期に南防波堤と北防波堤が完成し現在の留萌港の姿になりました。

今回の北海道みなとまち紀行・留萌編①では「千望台」や「船場公園（るしんふれ愛パーク）」「望洋公園」等を見学したのち昼食をとり、その後、「旧留萌佐賀家漁場」「留萌市海のふるさと館」「黄金岬海浜公園」等を見学します。

【千望台】

留萌市礼受町の海抜 180m の丘陵部にある「千望台」は留萌港や市街地を一望することができる展望スポットです（**地図①**）。この場所は、より広く海を見渡せるように、そして千里の彼方まで望めるようにとの願いを込めて「千望台」と名付けられたそうです。ここからは、北の海の向こうに国定公園の天売島や焼尻島を望むことができ好天なら利尻富士も遠望できます。

「千望台」には留萌港の建設等に尽力した留萌の名士、五十嵐億太郎の像が立っています。億太郎は



日本海に沈む夕日

明治 6 年（1873）に青森県下北半島にある風間浦村下風呂で佐賀庄四郎の五男として生まれ、明治 12 年（1879）、江戸時代にルルモッペ（留萌）場所の場所請負人であった栖原家の持ち船の船頭を務めていた五十嵐家の養子になりました。明治 19 年（1886）にできた北海道庁は北海道開拓のため外国から技術者を招聘し、どこに港湾を造ったらよいか英国人技師 C.S.メークに調査させたところ、石狩から宗谷の間では留萌が最も良いとの提案を受けました。当時留萌は人口 2,200 人ほどの寒村でしたが、明治 24 年（1891）、五十嵐億太郎の父である五十嵐綱治ら地元の有志十数名は大日本帝国議会に留萌築港の請願を行いました。しかし、いろいろな事情からかないませんでした。

その後、留萌よりも人口が多くこの地方で一番の都会であった増毛との間で築港の誘致合戦が行われました。億太郎は、父が明治 36 年（1903）に亡くなった後、その遺志を受け継ぎ留萌築港運動に尽力するとともに空知の石炭を留萌港で積み出すための鉄道建設にも奔走しました。その結果、鉄道敷設は明治 38 年（1905）の帝国議会で留萌・深川間の敷設工事が認められました。

また、留萌築港は明治 40 年（1907）に内務大臣原敬（はらたかし）（後の総理大臣）を留萌に招き、留萌港が増毛港より内陸との連絡が容易であるなどの優位性を説明したことにより、明治 42 年（1909）、帝国議会で留萌港修築が採択され、翌年着工されました。これらの鉄道、港湾等のインフラ整備はその後の留萌発展の礎となりました[1)]。

「千望台」からの留萌港や市街地の眺望

「千望台」にある五十嵐億太郎像

【船場公園（るしんふれ愛パーク）】

「千望台」から国道 231 号を通って船場町の「船場公園（るしんふれ愛パーク）」へ向かいます（**地図②**）。この施設は高規格幹線道路「深川留萌自動車道」のインターチェンジに近接し、「みなとオアシスるもい」の代表施設として、地元イベントの開催や地域観光情報の発信、地元特産品の物販等を行っています。また、令和 2 年（2020）7 月にオープンした「道の駅るもい」にも登録されています。

道の駅るもいに登録されている「るしんふれ愛パーク」

ドッグランやパークゴルフ場、芝生広場が広がる「船場公園」

毎年 5 月 5 日には、ここで留萌の特産物である、かずの子を知ってもらうことを目的に「かずの子のマチるもいフェスタ」が開催されており、かずの子の販売、グルメ屋台の出店などが行われています。後述する留萌の夏最大の祭りである「るもい呑涛（どんとう）まつり」の前夜祭もここの特設会場で行われています。エリア内には 7.8ha もの広大な芝生広場やパークゴルフ場、1 周 500m のジョギングコース、ドッグラン等多目的に楽しめる公園施設があります。「るしんふれ愛パーク」管理棟の 1 階は観光案内所や飲食店などがあり、2 階は屋外展望テラスから船場公園や留萌港の景色を見渡せる休憩スペースがあります。

また、管理棟に隣接して建っている屋内交流・遊戯施設「ちゃいるも」は、令和 4 年(2022)4 月にオープンした、地域住民のくつろぎの「空間」と地元特産品等の「魅力」を発信する新たな交流施設です。施設内には珍しい、いくつもの遊具を組み合わせた複合遊具やエアーマットなどを楽しめる「遊戯ひろば」があり、お子様連れファミリーなどが利用しています。

屋内交流・遊戯施設「ちゃいるも」

「おみやげ処　お勝手屋萌　道の駅店」

「やん衆あんどん」：令和 6 年（2024）7 月撮影

また、「ルモンド道の駅店 ルモカフェ」では、留萌産のかずの子を丸ごと一本のせた「かずの子ジェラート」や増毛産の菩提樹はちみつに漬けられたりんごを使用した手作りの「りんごのパイ」等を楽しめます。「おみやげ処 お勝手屋萌道の駅店」では、燻製にしたかずの子とチーズを組み合わせた「カズチー」や留萌産の小麦「ルルロッソ」を使用した生パスタ・生つけ麺などの留萌地域の特産品や道の駅限定グッズなどを販売しています。「ちゃいるも」に隣接して地域食材を生かしたグルメショップも営業しており、「北海道良水道の駅店」は、たこ飯・たこザンギ・たこ串焼きなど、留萌産のタコを使用したタコづくしメニューが人気です。

【るもい呑涛まつり】

留萌市では、例年 7 月下旬、夏最大の祭り「るもい呑涛まつり」が開催されます（**地図③**）。このお祭りは長年親しまれてきた「るもい商工港まつり」をさらに盛り上げようとして発展させたお祭りで、江戸時代のニシン黄金期の漁師たちの「シケでも嵐でもドンと来い。すべて飲み尽くしてやる」という心意気に由来するそうで、前夜祭と本祭の 2 日間にわたって行われます。

前夜祭では、船場公園の特設会場で、「呑るもナイトフェス」が開催され、ダンスパフォーマンスなどの各種ステージが実施される他、留萌市ならではの味覚を楽しむことができる地元グルメの屋台が多数出店します。2 日目の本祭の見どころは平成 2 年（1990）に初めて披露された「やん衆あんどん」です。豪華に装飾された高さ約 7m の立て上げ式の大あんどんを中心に 10 数基のあんどんが、「雷夜！」という威勢のいい掛け声と太鼓の音とともに市内の目抜き通りを練り歩きます。これに合わせて約 400 人の「はねと隊」と呼ばれる、はっぴ姿の踊り子たちが笛や太鼓の音に合わせて踊り歩き、街中が熱気に包まれます。

【留萌港南岸地区　石造倉庫】

「船場公園（るしんふれ愛パーク）」から国道 231 号を通って留萌港の南岸地区へ向かいます（**地図④**）。留萌の街は、留萌川河口の留萌港を中心に市街地が形成されてきましたが、その港に面した明元町の南岸地区には、切妻屋根妻入りの石造倉庫が連なり流通港の雰囲気を醸し出しています。切妻屋根とは屋根の頂上の棟から両側に流れる屋根形式のことで、妻入りとは出入口が屋根の棟と直角方向にある「妻側」に設けられているものを指します。

この日本通運留萌支店の石造倉庫は、明治末の留萌築港開始後間もなく、留萌倉庫（株）が港北（元町）に建てた 10 棟ほどの石造倉庫の一部を現在の位置に移設したものです。その後、北海運送社を経て日本通運に統合され現在に至っています。3 棟並

「留萌港南岸地区　石造倉庫」

んでいる石造倉庫のうち両側の 2 棟(3 号、5 号倉庫)は現在も倉庫として使用されています[2)]。

なお、この南岸地区では東側にある留萌地方卸売市場で例年 7 月頃、「うまいよ！るもい市」が開かれています。このイベントでは、殻付きウニの量り売りやホタテの詰め放題といった人気のお楽しみアトラクションの他、農水産品の直売や地元グルメの屋台、購入したものをその場で食べられる浜焼きコーナーなどがあり賑わいます。

【望洋公園】

留萌港南岸地区から坂道を上がって、留萌港を見下ろす大町の丘にある「望洋公園」に向かいます（**地図⑤**）。ここには、「松浦武四郎踏査の地」碑と第 3 代留萌築港事務所長林千秋の揮毫（筆書き）による扁額題字が埋込まれた「赤灯台」（旧留萌港西突堤灯柱）があります。扁額とは、建物や門、鳥居などに掲げられる横長の額のことで、建物などの名前やその建物などに対する思いを表す言葉が書かれています。

また、この公園に隣接して、前述した五十嵐億太郎の邸宅の跡地があり、そこにはかつて航海の安全等を願って「留萌湊神社」が建てられていましたが、令和元年（2019）に解体撤去され、いまは神社跡地となっています。

現在使われている「北海道」の名付け親である松浦武四郎は、弘化 3 年（1846）と安政 3 年（1856）

「松浦武四郎踏査の地」碑

に留萌を訪れており、弘化の時の記録は「再航蝦夷日誌」に、安政の時の記録は「西蝦夷日誌」に収録されています。この二つの日誌を見比べるとわずか10年の間にルルモッペ（留萌）の姿がいかに変わったかを知ることができます。弘化の時、留萌の増毛町寄りの礼受の浜を通った時は一軒の人家もなかったのに、安政に再度通った時は和人の出稼ぎ小屋が建ち並び、たいへん繁盛していました。また、留萌の河口には運上屋や通行屋、備米蔵、船蔵などの建物が並び、船着場には 7～800石積みの大きな船がつながれていたそうです。当時、留萌場所の請負人は栖原六右衛門で苫前、天塩場所も請け負っていた有力な場所請負人でした。特にルルモッペは六右衛門の請負場所の中心地でした。この公園にある「松浦武四郎踏査の地」碑は、武四郎が留萌を初めて踏査してから 150 周年となるのを記念して平成 7 年（1995）に建立されたものです[3)]。

また、林千秋は近代港湾整備の先駆者であ

「赤灯台」に埋め込まれた林千秋の扁額題字の「千紫萬紅」

「望洋公園」からの留萌港の眺望

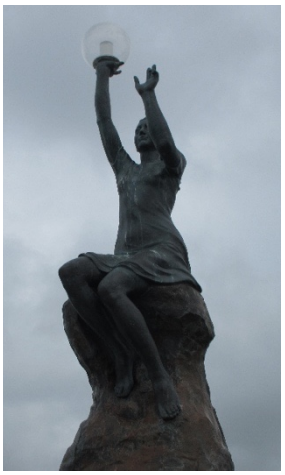
「望洋公園」には、正面に移設・保存されている「赤灯台」、右側に「松浦武四郎踏査の地」碑が見える

る廣井勇の門下生ですが、大正 4 年（1915）留萌築港事務所勤務となり大正 7 年（1918）留萌築港事務所長となりました。そして昭和 4 年(1929)に休職するまで留萌港の南防波堤建設の難工事や留萌川付け替え、内港掘込工事等の指導の任にあたりました。南防波堤の内港側へ昭和 6 年（1931）に建設された西突堤に設置された「赤灯台」には、氏の揮毫による扁額題字「千紫萬紅」が埋め込まれています。この言葉は、多くの辛い苦労を乗り越えるという言葉「千辛万苦」をかけて留萌の港が多くの船の灯で満ち賑わうことを願った言葉だといわれています。この「赤灯台」は約 60 年の役割を終え、平成 9 年（1997）に撤去されましたが、市民から歴史的遺産として保存したいとの要望があり留萌港を見下ろすこの「望洋公園」へ平成 10 年（1998）に移設され保存されています。

なお、礼受町の「千望台」には、氏の業績を讃えて、昭和 59 年(1984)にこの「千紫萬紅」の扁額題字を刻んだ石碑が設置されており、他に留萌築港に関わった人々の扁額題字を刻んだ石碑（中村廉次の「光達遙天」、伊藤長右衛門の「光波万里」、小松悌治の「青灯擁内港」）とともに遠く留萌の港と街を望んでいます[4) 5)]。

【デザイン灯台 波灯の女】

「望洋公園」から道道 22 号を下って留萌港大町地区に行きます（**地図⑥**）。ここには全国的に見ても珍しいブロンズ(青銅)像の、女性が灯火を右手に掲げるデザイン灯台「波灯の女」が建っています。6.65m の高さから 14cd（カンデラ）の光を沖合 5km にわたって照らす LED を使用したこの灯台は、平成 19 年(2007)に市民によって寄贈されたものです。この「波灯の女」は、海を望むように西に向かって座っていますが、「海・波・風・夕日・港」から未来に翔く留萌をイメージし、安全な航海を願って設置されたもので、観光モニュメントの役割も果たしています。



デザイン灯台「波灯の女」

【カリーザイオン】

大町地区の「デザイン灯台 波灯の女」から道道 22 号、国道 231 号を通って中心街へ向かいます。昼食は花園町のスープカレー専門店「カリーザイオン」にしました（**地図⑦**）。スープカレーは札幌市が発祥地ですが留萌にも人気のあるお店があるというのでここにしました。店名の「ZION」は、中米ジャマイカのレゲエ用語で「神の国」を意味するそうです。店内は、黄色を基調としたおしゃれな空間でアフリカなどの工芸品が飾られておりスープカレー店らしい異国情緒が漂っています。ご主人が厨房で腕を振るい、奥様がお客さん対応をしていてアットホームな雰囲気です。

肉と野菜を 5、6 時間煮込んで寝かせたスープは、コクがある濃厚な味わいで、地元留萌産の新鮮な野菜が使われています。スープカレーのメニューは、チキン、豚角煮、キーマ、野菜、ニラ豚、

スープカレーの店「カリーザイオン」

ニラ豚スープカレー

かしわネギなどが並び、半熟ゆで卵や揚げ納豆、野菜などのトッピングもつけることができます。辛さは 10 段階から選ぶことができ、2 が中辛くらいで 10 が大辛です。珍しいと思ったニラ豚スープカレーを注文してみました。シャキシャキした新鮮なニラと細切りの豚肉の旨味がマッチしていてスープも濃厚で味わい深かったです。

【一久庵】

花園町の「カリーザイオン」から国道 231 号に出てすぐ近くにある住之江町の菓子店「一久庵」に行きます（**地図⑧**）。このお店は洋菓子や和菓子を扱うお店で創業から半世紀以上にわたり地元の人々に愛されてきています。ここでは銘菓「にしんパイ」の他、ケーキ、羊羹、プリン、ソフトクリームなど様々なスイーツを取り揃えています。

地元の特産品であるニシンを使用した「にしんパイ」は、江戸時代からニシンとともに歩んできた留萌の歴史にちなんで考案された名物菓子です。魚の形をしたパイ生地の中に留萌産のニシンの粉末を練り込むことでニシンの風味を生かしつつ、お菓子として食べやすいように工夫されており、初代、二代目、三代目と内容を進化させた 3 種類の「にしんパイ」が販売されています。

「初代にしんパイ」はニシンは入っていませんがバターの香りが豊かな昔ながらのパイ菓子です。

菓子店「一久庵」

三代目プレミアムにしんパイ

「二代目にしんパイ」はニシンをパイ生地に練り込んでおりニシンの風味が感じられます。このパイは特別な製法でニシンの臭みを取り除き、低温乾燥機で乾燥させて骨や皮を取り除いたニシンの粉末を生地に練り込んでいます。最も新しい「三代目プレミアムにしんパイ」は二代目に加えて、かずの子が入っていてより贅沢な味わいのパイになっています。

「三代目プレミアムにしんパイ」を食べてみましたが、程よい甘さと塩味、そしてバターの風味にニシンの香りが広がりおいしかったです。

【旧留萌佐賀家漁場】

住之江町の菓子店「一久庵」から国道 231 号を通って礼受町の史跡「旧留萌佐賀家漁場」へ向かいます（**地図⑨**）。「旧留萌佐賀家漁場」は、留萌市街から 4km ほど増毛町寄りの日本海沿岸にある国指定史跡です。通常は非公開ですが、例年 8 月上旬頃、一週間程度一般公開されています。

今回の見学では、留萌市教育委員会の学芸員松尾悠亮（まつおゆうすけ）さんに案内していただきました。松尾さんは留萌に来られる前は、福島県会津の博物館で勤務され、そこでは地域おこし協力隊の活動をされていたそうです。

佐賀家は青森県下北半島下風呂村（現在の風間浦村下風呂）の出身で、佐賀家漁場は江戸時代の弘化元年（1844）に佐賀家八代平之丞（はちだいへいのじょう）が留萌で初めて礼受にニシン漁場を開き、以来昭和 32 年（1957）まで 113 年間にわたってニシン漁を営んできた漁場です。佐賀家は最盛期に留萌で 12 ヶ統（とう）のニシン建網（たてあみ）を経営していましたが、礼受のこの場所は元場（もとば）と呼ばれて佐賀家の留萌における根拠地として代々受け継がれてきた場所です。

北海道西海岸ではかつて多くのニシン漁場が存在していましたが、「旧留萌佐賀家漁場」は現在、往時のニシン漁場の姿を知ることができるものと

「旧留萌佐賀家漁場」施設群全景（留萌市教育委員会資料）

「旧留萌佐賀家漁場」の「母屋（番屋）」外観

して類を見ないものです。現存する施設は、江戸時代末から明治初頭にかけての建造と考えられる「母屋（番屋）」、明治 36 年（1903）建造の、ニシン粕などの製品を保管しておく「トタ倉」、漁船を収納しておく「船倉」、定置網や枠網などの網類を収納しておく「網倉」、沖揚げした生ニシンを一時貯蔵しておく「廊下」、漁場の守り神である「稲荷社」があり、数次の改造を経ながら一連の建築群として現存し、このことが大きな特徴です。また、船着場、ニシン粕の干場、ニシンを炊いた竈跡などもあり往時のニシン漁場の姿をよく残しています。

「母屋」の玄関を入るとすぐ土間が通り、左手に雇い漁夫の 2 段の寝台、右手に板の間や親方の居住部分を配置しています。板の間は広々としており、囲炉裏や竈などがあります。親方の居住部屋は畳の間で、入ってすぐの仏間には造り付けの仏壇と神棚がありました（この当時は神仏混合）。また、ニシン漁の様子を目近に見ることができるように海側の窓から海を見渡せるようになっていました。「母屋」を説明していただいた後、その他の施設も見学しました。

「母屋(番屋)」板の間

「トタ倉」にあるニシン漁労用具
（国指定重要有形民俗文化財）

「母屋」から国道 231 号を渡った海岸部にある、沖揚げした生ニシンを一時貯蔵しておく「廊下」は、ニシン漁期以外は漁船の仮置場となっていたそうですが、大きな漁船が 3 隻仮置きされていました。また、「母屋」の東側にある「トタ倉」は、ニシン粕などの製品を保管しておく倉庫で、ネズミなどが入り込まないようにトタンを張っていたため「トタ倉」と呼ばれましたが、ここにもたくさんのニシン漁労用具が保管されていました。この「旧留萌佐賀家漁場」には全体で一万数千点にのぼる、ニシン漁の準備から陸揚げ後の加工までの過程で使用されたニシン漁労用具が残っており、その中の 3,745 点が国の重要有形民俗文化財に指定されています。このようにニシン漁労用具が一括で残されている例は他になく貴重だそうです。なぜ多くの漁労用具が残ったかというと、例年のようにニシンの来遊があるものとして、漁夫を雇って準備をしていたところ、昭和 32 年（1957）を境に留萌近海にニシンが来遊せず漁が途絶え、準備していた漁労用具を倉々にしまい込んだままにしていたため、現在までそのまま残されたそうです。

その後、漁船を収納しておく「船倉」、定置網などを収納しておく「網倉」なども見学しました。「旧留萌佐賀家漁場」には多数のニシン漁場の経営関係の文書も残されているそうで、それらの文書や一連の漁場施設群、多数のニシン漁労用具等は北海道日本海沿岸の近世～近代漁業の歴史と文化を伝える貴重な遺産となっています。

【留萌市海のふるさと館】

「旧留萌佐賀家漁場」から国道 231 号を通って大町の「留萌市海のふるさと館」へ行きます（**地図⑩**）。「留萌市海のふるさと館」は留萌市の景勝地黄金岬の高台に位置し、江戸時代に留萌川河口に寄港する北前船の夜間の目印とされた烽火台として使われた場所にあります。「留萌市海のふるさと

「留萌市海のふるさと館」

館」は、留萌を育んできた海を理解し、海と関わってきた留萌の歴史を知るための博物館として開館しました。「旧留萌佐賀家漁場」を案内していただいた留萌市教育委員会の学芸員松尾悠亮さんにこの施設も案内をお願いしました。

1階には常設展示室と特別展示室があり、2階は展望ラウンジとなっています。1階の常設展示室には、「留萌の海を知る」「留萌の歴史をたどる」の2つのコーナーがあります。「留萌の海を知る」のコーナーでは、日本海の誕生を語るアンモナイトやホタテなどの貝の化石や大和田炭田の石炭層が森林から形成された経緯と掘り出された大きな石炭塊、日本海の海流と海のいきものたちの特徴などが展示されています。また、「留萌の歴史をたどる」コーナーでは、三泊(さんどまり)村の高台の縄文文化遺跡や留萌に住んでいたアイヌの人たちの記録、北前船航路や弁財船、ニシン漁関係の漁労用具などが展示されています。

アイヌ文化関係では江戸時代の当地域のアイヌの酋長(しゅうちょう)コタンピルが着用していたという竜の刺繍(しゅうもんよう)文様の入った豪華な絹製の山丹服(さんたんふく)のレプリカが展示されています。この衣服は中国南部で織られたものですが、樺太(からふと)経由で北海道に入ってきたものと考えられています。アムール川下流に住む山丹人が、清との毛皮交易で手に入れた中国本土の産品を、樺太アイヌの手を経て北海道のアイヌにもたらしていました。逆に本州から手に入れた日用品が逆のコースで交易されていました。コタンピルの一族は、この山丹交易のルートによりこのような衣服を手に入れたと考えられています。

山丹服

星兜

また、中世の武士がかぶった星兜(ほしかぶと)も展示されていますが、これは明治31年(1898)頃、留萌市エンドマッカ(現塩見町)より出土したもので、平安時代末の作と考えられています。平安時代の星兜は北海道では3例しか発見されておらず兜の移り変わりを調べる上で貴重な資料です。どうして留萌から出土したかという点については、室町時代頃に東北地方の争乱で敗れた武将が、この地へやってきたからという説と、コタンピル一族が本州から手に入れて宝物として所持していたからという2つの説があるそうです。

映像展示コーナーでは、「つぼみの留萌」と「留萌みなと物語」の2つの映像を上映しています。これらの映像から大正から昭和にかけての留萌の様子や、留萌港の誕生の経緯、留萌港建設に尽くした人々のエピソードなどを知ることができます。

なお「留萌みなと物語」のテーマ曲「海燃えて」は次に述べる留萌市出身の佐藤勝(まさる)が作曲したものです。

特別展示室には、留萌市出身の映画音楽作曲家・佐藤勝に関する展示品があります。氏は、戦後の映画全盛期に、黒澤明監督の「用心棒」や山田洋次監督の「幸福(しあわせ)の黄色いハンカチ」など300を超える多くの映画音楽を作曲しました。また、映画音楽を映像に付属した作品としてだけでなく独立した一つの作品として人々に親しんで欲しいとの思いから、郷里の留萌をはじめ、各地で映画音楽を中心としたコンサートを開いています。これらのことから今なお多くの人々に感動を与えています。ここには、郷土留萌が生んだ偉大な作曲家を後世に伝えていくため、氏の作品や氏が作曲時に使用していたピアノ、愛用品などが展示されています。

2階にはガラス張りの展望ラウンジがあり、黄金岬や日本海を展望できます。

佐藤勝が作曲時に愛用していたピアノ

【黄金岬海浜公園】

黄金岬の夕日

「留萌市海のふるさと館」の海側の下の海岸部にある黄金岬は柱を積み重ねたような奇岩がいくつも立ち並ぶ独特な景観をもつ海岸です（**地図⑪**）。これらの岩礁は地下の深いところで発生した火山性溶岩であるカンラン石玄武岩の柱状節理です。かつて、ここへ押し寄せたニシンの大群が夕日に照らされ黄金色に見えたことが黄金岬の名の由来といわれています。ここは日本海に沈む夕日の絶景スポットとして知られ「日本の夕日百選」に選ばれています。また、冬季には日本海の荒波が押し寄せる海岸でもあり、インドのチェンナイ（旧マドラス）、イギリス・スコットランドのウィックと並ぶ世界三大波濤の一つとされています。

この海浜公園には、記念碑「波濤の門」と前述した佐藤勝の「若者たち」の歌碑があります。記念碑

記念碑「波濤の門」

「波濤の門」は留萌ロータリークラブが昭和61年（1986）に創立25周年の記念事業として建立したもので次の碑文が刻まれています。

「厳しくも力強い日本海の波濤
　幻想的なきらめき　落陽のロマン
　遥かなる海を眺めるとき
　そこに幾多の先人のドラマを知る
　この門は天の力、地の力、人の力に支えられ
　いま限りないヒューマンの精神を希っている」

また、「若者たち」の歌碑は留萌市の市政施行50年・開港60年の記念事業として、平成9年（1997）に建立されたもので、「若者たち」は佐藤勝がフジテレビ系で放映されたテレビドラマ「若者たち」の主題歌として作曲したものです。この歌碑には、「君の行く道は～果てしなく遠い～…」の楽譜が刻まれており、その下段末尾には「生まれたときのまま　この海この音　私は留萌の語り草になりたい　佐藤勝　1977年秋」と、氏の郷里留萌に対する思いが直筆で刻まれています。

佐藤勝の「若者たち」の歌碑

【黄金岬沖　海洋構造物実海域実験】

黄金岬の沿岸は、前述したように世界三大波濤海域の一つとされていますが、この黄金岬の沖合海域で1980年代に大型海洋構造物の技術開発に係る研究が行われました（**地図⑫**）。

1970年代に多くの国が排他的経済水域を設定し始めましたが、昭和57年（1982）の国連海洋法条約で正式に排他的経済水域が成立しました。四方を海に囲まれた日本は、陸地面積は約38万平方km に過ぎませんが、領海と排他的経済水域を合わせた面積は約440万平方kmもあります。この広い海を海洋人工島や波力発電、水産資源の増養殖、海洋

黄金岬沖に設置された「海洋構造物」の全景（上）と、着氷した状況を捉えた海洋構造物：2 点とも昭和 63 年（1988）2 月撮影、国立研究開発法人土木研究所寒地土木研究所提供

性レクリェ―ションなどの場として積極的に活用するため、旧科学技術庁の予算により 1980 年代に、「海洋構造物による海洋空間等の有効利用の研究」の一環として「大波浪海域における海洋構造物の実海域実験研究」がこの黄金岬の沖合海域で行われました。当時日本では、海洋の活用事例として神戸のポートアイランド、長崎の海上空港、沖縄のアクアポリスなどがありましたし、地元の留萌市も第三期留萌市総合計画（1988～1997 年）において、「海と大地に未来を創造する都市―ロマン萌ゆるマリンポリス留萌―」として、「マリンポリスー海洋都市ー」を新しいまちづくりの大きな柱としていましたのでそれにも合致するものでした。

現地における実海域実験は、当時の北海道開発局土木試験所が行いました。昭和 59 年（1984）、円柱部材に作用する波力や波圧等を計測するための鋼管製の実海域実験構造物（延長 10m×幅 5m、天端・海面上+8m）が、黄金岬沖約 160m の水深 7m の位置に設置され、波力計や波圧計、ひずみ計等が取付けられました。波力については、鉛直円柱部材の-2m の位置に全方向波力計を取り付け、また波圧は鉛直円柱部材や水平円柱部材等の-2m～＋4m の位置にひずみゲージ式波圧計を取り付け計測が行われました。この観測結果の検討は、現地海洋構造物調査検討委員会（委員長：尾崎晃（あきら）、委員：近藤俶郎（ひでお）、合田良實（ごうだよしみ）他 4 名）で行われ、数年かけて実施された現地観測の結果、大波浪海域における海洋構造物に作用する波力、波圧等の様々なデータを取得することができました。そして、その成果は社団法人土木学会の海岸工学講演会などに発表されました。

さらにこの観測中に、当海域のような大きな波浪が来襲する寒冷海域では、冬季は海洋構造物への着氷による作用波力の受圧面積の増大などについても考慮しなければならないことがわかり、それに対応するための着氷調査も行われました。この調査では黄金岬に陸上監視局を設置し 35mm 一眼レフカメラや CCD カメラを使用して着氷状況を観測し、いろいろな知見を得ることができました。当時、こうした海洋構造物の着氷調査は世界的にも珍しかったため、この成果は平成 3 年（1991）にイギリスで開催された国際海洋・極地工学会議（ISOPE）で発表されましたが、この会議の発表論文集の表紙にこの着氷した海洋構造物の写真が掲載されたそうです。その後アメリカなどからもこの海洋構造物の着氷調査についての問い合わせがあったそうです。なお、この海洋構造物は、これらの調査の終了後、撤去されました[6)7)]。

【留萌港南防波堤】

黄金岬から留萌港方面を見渡すと、激浪から港を守っている「留萌港南防波堤」を遠望することができます（**地図⑬**）。この南防波堤は、明治 43 年（1910）からの留萌築港事業の中で最初に着手した外洋防波堤（海に直接面した防波堤）です。

この防波堤はケーソン構造ですが、同じ構造形式の小樽港南防波堤とほぼ同時期の施工で、わが国初期の施工となるものです。ケーソン構造とは、鉄筋コンクリートの箱にコンクリートや砂等を詰めて、その重さで波の力に耐える構造のことです。このケーソンの製作は、当初、留萌港で行われ、陸上で製作し、斜路（しゃろ）（滑り台）を滑らせ海上に進水さ

土木学会選奨土木遺産である「留萌港南防波堤」

せた後に設置場所に据え付けていました。しかしケーソン製作ヤードの斜路(海中部)やその周辺の海域が漂砂(ひょうさ)で埋没し、その除去に多くの日数を要したことや、施工中の激浪などの災害に伴う工事のやり直しが多かったことなどが工事を進める上で大きな支障となっていました。そこで、工事の効率化を図るために、遠く離れた小樽港の斜路式ケーソン製作ヤードでケーソン（約 10m 四方、高さ約 8m）を製作し、留萌までの約 100km を引船で約 30 時間かけて曳航(えいこう)するという方法で施工することになりました。気象・海象情報が乏しく、小型作業船しかない時代における、このようなケーソンの長距離輸送は世界にも前例がない、前代未聞の偉業でした。そして大正 11 年（1922）から昭和 3 年（1928）までの 7 カ年にわたり、ケーソン計 33 函を運搬して、昭和 4 年（1929）南防波堤の延長 939m の竣工に至りました。

この外海に面した南防波堤は、激しい波浪と厳冬の工事条件を克服して施工が行われ、激浪による防波堤の移動や破損を経ながらも、港と街を守り続けてきたことから、平成 22 年（2010）に歴史的、技術的な価値を有する構造物として「土木学会選奨土木遺産」に選定されています[4) 8)]。

（関野高志　記）

※各項目末尾に記載した数字は、右記の参考文献の数字に該当します。

■参考文献

1) 留萌市教育委員会編、福士廣志著：留萌百年物語「五十嵐億太郎物語」、平成 29 年(2017)
2) 北海道近代建築研究会編：旭川と道北の建築探訪、平成 12 年（2000）
3) 福士廣志編・著：留萌いまむかし、平成 9 年(1997)
4) 小澤榮著：留萌港と大阪北港を築き苫小牧築港を唱えた「技師林千秋」、平成 25 年(2013)
5) 留萌市編：新留萌市史、平成 15 年(2003)
6) 谷野賢二、平沢充成、角野隆：大波浪海域における海洋構造物の実海域実験－円柱部材の作用波力について－、(社)土木学会 第 35 回海岸工学講演会論文集、昭和 63 年（1988）
7) 平沢充成、谷野賢二、水野雄三、時川和夫、大村高史：ジャケットタイプ海洋構造物の着氷調査について、(社)土木学会 海洋開発シンポジウム論文集 Vol.6、平成 2 年（1990）
8) 石川成昭著：留萌港南防波堤－新旧鰭渾然一体，港とまちを守り続ける－、土木学会誌 Vol96、平成 23 年（2011）

【今回の巡回ルート】

❶千望台 → ❷船場公園（るしんふれ愛パーク）→ ❸るもい呑涛まつり →

❹留萌港南岸地区 石造倉庫 → ❺望洋公園 → ❻デザイン灯台 波灯の女 → ❼カリーザイオン → ❽一久庵 →

❾旧留萌佐賀家漁場 → ❿留萌市海のふるさと館 → ⓫黄金岬海浜公園 → ⓬黄金岬沖 海洋構造物実海域実験 → ⓭留萌港 南防波堤

【今回の巡回ミニ情報】

地図①
千望台
留萌市礼受町
※市内を一望できる夜景スポット。GW から 10 月中旬まで展望室とトイレの利用可能。施設内には期間限定でログハウス風の休憩施設「Heart Land Cafe」も営業中(6 月中旬～9 月下旬)。
電話　0164-42-0569(Heart Land Cafe)
営業時間　10:00～16:00

地図②
船場公園(るしんふれ愛パーク)
留萌市船場町 2 丁目 114
電話　0164-43-1501(るしんふれ愛パーク管理棟)
営業時間
9:00～18:00(5・9 月)/9:00～19:00(6 月～8 月)/9:00～17:00(10 月～4 月)
※ショップ、カフェの時間は HP で確認。
定休　年末年始(12 月 31 日～1 月 5 日)

地図③
るもい呑涛まつり
電話　0164-42-1840
(留萌市経済観光課)

地図④
留萌港南岸地区　石造倉庫
留萌市明元町 2 丁目 2
電話　0164-42-2724
(日本通運留萌支店)

地図⑤
望洋公園
留萌市大町 3 丁目 191
電話　0164-42-2010
(留萌市都市整備課)
24 時間散策自由

地図⑥
デザイン灯台　波灯の女
留萌市大町 1 丁目
電話　0154-42-1840
(留萌市経済港湾課)

地図⑦
カリーザイオン
留萌市花園町 1-4-21
電話　0164-42-2297
営業時間　11:00～14:30(14:00LO)、
17:00～19:30(19:00LO)
定休　月曜日

地図⑧
一久庵
留萌市住之江町 1-38
電話　0164-42-2740
定休　火曜日
営業時間　10:00～18:00(1 月～3 月)
10:00～18:30(4 月～12 月)

地図⑨
旧留萌佐賀家漁場
留萌市礼受 13-1
電話　0164-42-0435
(留萌市教育委員会生涯学習課)
※例年 8 月第1週頃一般公開。期間以外の見学希望者は上記に問い合わせ。

地図⑩
留萌市海のふるさと館
留萌市大町 2-3-1
電話　0164-43-6677
開場時間　9:00～18:00
定休　10 月下旬～4 月下旬
入場料　無料

地図⑪
黄金岬海浜公園
留萌市大町 2
電話　0164-43-6817(留萌観光協会)
散策自由
※近くには黄金岬キャンプ場、オレンジハウス、売店・食堂も併設(冬期間閉鎖)。

地図⑫
黄金岬沖　海洋構造物実海域実験
電話　011-841-1684
(国立研究開発法人　土木研究所寒地土木研究所寒冷沿岸域チーム)
※現在は撤去。

地図⑬
留萌港　南防波堤
留萌市寿町 1-68
電話　0164-42-1205
(留萌港湾事務所)
※令和 7 年(2025)10 月 14 日、留萌開発建設部本部庁舎内に移転

＜連絡先＞
NPO 法人　北海道みなとの文化振興機構
札幌市北区北 11 条西 2 丁目 2-17 セントラル札幌北ビル 5 階
e-mail アドレス　mail@minatobunka-npo.info
ホームページ　https://minatobunka-npo.info